

龍室

五七子一巻

中村俊定文庫
文庫 18
128



休其樓世湖



勿塞

許六選



五老井記



靈泉あり水乃しゆれり終は尺あまると
て三尺許を池より流き出らるり溜みたり
五老井と名づく別墅ありてきて五老菴と
後小主人姓ハ木名ハ許六とつゝ五老井居士
と潜すおまを予り別号也驛の原不也川
流沖て有る龍の山南よりちち十旬の休暇と

うらひ半井村領事(江也)遙よまき東
江(江也)の氣錫と坂西よ極一めまへれおす
重泉と共よ波てゆ隆の白いと藤の中よ
とめじとなし一其水乃は清きるゆを惠
山乃泉脈と通一あまあはは肅列の令泉
よひと一まへるまをれお白敷の葉紙をけて
まのな河の生酒とせらふのりかきつへう
一と也のつらよこまていぬと教ふゆを其を
と寸崖山鳴井盤お細涼る上人の抑の

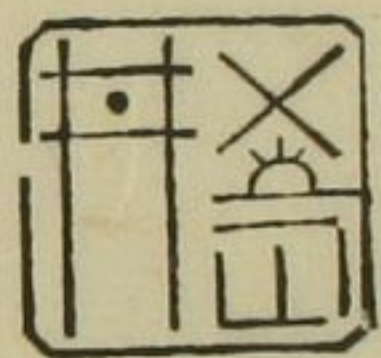
後も今けぬよ付依思も法其要を廣大す
て神仏のまをすししめ且竟の井河橋馬橋
水と夷くまよと河氏根おやのなる
一と後よ山あまよと葉の思といし時を
みまよおして眺をまよまわち一御あ
の(江也)に南に小お山のまをすまの目枝伊吹
山(江也)に上おま根よ時とましく申酉の方よ
衝の思あり取んをまお清方よりた上る
ま所とまらぬ杖と申て八公殿と廻り思す

登る微を壘（ミ）とすけ粟を茗粥と炊
く柳店を粥に蓬之牧と設きて膝と案
め廣を六人一席を全くす茶碗五つ枕
五つ筆墨のれり物ま一日に杜宇と流
騷の流子里砂砵と合て煙をいり世
庭は筆紙あて寸楸は本錡（ハサミ）と入寸窓の
のち自（ウラ）なりものぬく如と穿て八拍の凡
種とぬちを色れかみと狂（マ）とくも山
蛸の宿（ノ）とさるるあさる噴（ハ） 陽生文回子

僻（ヒ）とるる二十余季子膽芝瑞と師とし
柳子呆るる人の骨髄と窺て舌裡の芭蕉
友天は梅自然は一味のゆねと魚むと寸
世上平の筆根と樂て平の心鏡のたのひ
とさく寸尺筆を乞也とあそび重番ハ
御堂乃ちの戯となるいさひゆねの宿
文画と樂世のささくす平と草平志の
円一とさやく家とるすけはやく
後日樹下は流個すれと山文と管の物

まし甲陳の毛は色む間の蜂蝶のこ糸て
青きよ脈つこと敷し五毛の流し脚
を洗て還る干肯元録五奉壬申春三
月於盤樂村林下勝毫

あまきし河尋ひて見ぬ柳うれ



九祿壬申冬

十月之日許六亭具り



くまき人ものれ神河每
野を仕をる麻麦乃あゝ士 許六
伊実と賣じ小粒の吐味て 洒堂
汁乃煮しは杖のゆき肌 益水
岩の月奥(入)厚し 古 益 煎棠
とん工丈よ麻敷屋乃泊り 筆

たき

方ケを市と乃侍室中より踏まれて
 焼焦タキ——海小島もみほ
 糝テつむ色の紫とよめさす
 瀬カイ碓との海なるり入口
 中から籠もぬ人もら文子
 和追のけて蛸の喰飽キ
 青イ書かあらし神の文遷
 小島を萩乃ゆそあふくつ
 八月を流面白き小服海
 寺 六 符 水 棠 堂 六 翁 小

焼山あし乃を所赤くけ
 市記す島しもの木陰よて
 けいも ちふ子鶴乃卵イ家
 名
 まふくはちの富美あつや
 当座の通と酒よ解すれ
 ちはるまと籠一ちみひ書て
 お名きくこ通 長持の上
 灯乃教つ——子甲待キ
 山ほく——子安山と出る夢
 六 翁 水 棠 寺 六 翁 小

建

兎をさる鮎の走る鏡ゆるされて
 瓦目よかよよおまの屋の女分
 みのやう殿高も三つへきし守實
 毘色をのいえて出る物
 みのめち毘今門堂の小方丈
 瓦のまり〜ぬ 狐 や〜き
 一〜し〜ま〜ま〜紫のまき落原
 原を〜下る 管根路の坂
 宗長れ〜ま〜寸白も〜子の位
 葉 水 紫 花 盆 盆 葉 堂

葉磨〜り〜たむ石好の葉
 どのまきま〜へ〜て〜ゆる神楽
 七十乃加久抄み草堂立
 葉 堂 六

開吟

李由

艷船や比良より小を寄るま
 芝浦洲迄を保と秘れり 許六
 酒乃を付あそぶ家業のまきて 汶郵
 京のゆきゆき干機場あはする 徐寅
 月々き揚湯は祇のぬれ道り 六
 一城より海軍千荷 厚 由

多るこは候子の子稻をまよて
 女房の侍子 丈乃いりさく 村
 門口に化粧立ふ家客の者 由
 向子や舟家 目世乃蓋四 六
 はふそ穂の葉のしらくともあるなほ 六
 はんたひ尻のあま風 小鹽 子
 引飯乃を女用とて 男アを 六
 肩が 風を家風の出かふる 由
 大坂を木路のやすき状のまて 寅

塞

月夜を渡る 奥の世の中
 一あゝ一老樹の花は山崎より
 池を向けるまき子 蛭 鳴 なるま
名 永きう日れ 十三 掃ま 言ま うちま
 勢 一 解て 礼をいひらゝ
 朧まよこいとの 葦笥のふたはれ
 道 一 一 せられのけし くら橋
 山城のふち中 咄 一 ちい子
 上のかかる亀の橋 小 船 明
 六 寅 六 由 子 村 由 六 村

掃ちまゝる小庭は 柘とゆりまを
 へけつけて 是 留 陰 乃 丸
 物 答 の 先 口 も 一 一 ぼき けて
 屋 一 一 の 際 と 一 一 小 ち 子
 そよくと 麻は 凡 一 一 又 月 夜
アコ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
テ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 典 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 何 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
イカ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 船 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六

建

頼りまき子此錦とるふ縁
はまをく圓平をもり色をり
昔も糸菜も涙くち色
寅 村 由

式吟

智波

杖も名を厚あり梅も字も小
葉東海アそくくかゝる屋赤信 許六
善の月窓へまのれを赤外て 利牛
何とも忘れすくまの奥^カまら 坡
大勢の中て精おす 五^カさー 六
えやいセツ乃清此 穿 鬘 牛

葬^ツ礼子傘を懐へあつて
 女房乃敵よ一ツ唇せせ
 餅^キ菓をよつそれ^キ餅^キをあて^キ
 かいと書^キいる^キ毒^キ野^キの^キ攻^キ
 用心乃や杯の^キ碓^キ平^キを^キは^キて
 玉子の^キ殼^キれ^キ多^キき^キ掃^キ返^キ
 何^キる^キも^キの^キ神^キさ^キん^キ長^キ宗^キる^キ
 日^キ野^キ商^キ人^キの^キ床^キる^キま^キや
 梅^キ家^キ靴^キと^キひ^キの^キり^キは^キす^キも^キ心^キ
 半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ

晴^キ嵐^キさ^キら^キし^キ寺^キ乃^キ芝^キ土^キよ^キ
 去^キん^キく^キと^キ舟^キ夜^キの^キ水^キれ^キ落^キる^キ者^キ
 名^キ熱^キ嫁^キ追^キわ^キす^キ肌^キの^キき^キを^キあ^キさ^キ
 林^キさ^キま^キい^キあ^キら^キね^キ着^キ座^キし^キさ^キめ^キき^キで^キ
 家^キ入^キ前^キ乃^キ三^キ井^キの^キ振^キ舞^キ
 一^キ少^キりの^キぬ^キよ^キ涼^キき^キの^キ杖^キの^キき^キ
 女^キ子^キさ^キり^キま^キが^キも^キの^キさ^キひ^キに^キは^キ
 燦^キ輝^キの^キた^キき^キで^キ煮^キの^キ煎^キら^キく^キ
 ち^キや^キ海^キ風^キ野^キの^キ吹^キ合^キ
 半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ半^キ六^キ坡^キ

ちんちんを傷と通つて奥よみ
 ちんちんを傷と通つて食持焦つく
 旅人のもつといふやまは伊達とて
 けあみ糸日くれくくり
 素禪の徳のりくおの代
 解り懸ひよ藤と進せ
 招居紙水のりまきりり
 痺癩とつるに戸の宿実
 魚偏よ是やきじやの物取の
 六 坡 月 六 坡 六 八 六 坡

ままはてハ度な掃まり
 一年乃お肩油冷込むも甚
 派まの旅子の鳴さるる
 六 坡 筆

三吟

木導

峠越えろえろ鶴のさむさむ
 宵の豆腐のぬる 俎板 朱袖
 ぬるぬるの茶鞋踏やうて 許六
 きさかり袖と腕中よまき 辱
 着地て灯とふすまやれ 辱
 有る場の上へ丁もさる也 六 袖

ひはちりと曹田宗好製は海で 辱
 やつられて又茶研もする 袖
 又茶のて下女を化粧が尻り 六
 泣かすべし平々々々とむく 辱
 芥くくよぬ茶畑へ茶漬食 袖
 衣を髪へ昇て上る 辱
 皺のよも琥珀乃珠粒のたす 辱
 菘も靴もぬ浪の有咄 袖
 所へは浪をさるれいあまて 六

漁村乃並小湊其誤糟
 前蓮月のみつ流寺よももら
 浜生も言そし夜も此流隈
 若 筒茶首平しつ付くまの他
 文井いこつに友堂乃友
 よし女の子持を嘘も撫息て
 前よ敷も飯うい刻乃帯
 此が子戸板の上れ鬼祭
 まご 廻買麦平 状の物際
 六 袖 辱 六 袖 辱 六 袖 辱

巾着くろ甲と脱て月と見る
 矢口のみこく平う家玉川
 素粒れほりく落るぬの中
 肺す乃ぬ形也る帯外
 精をよ集死きする旅の岩
 解毒の種と孫よいハ屋
 珊瑚珠のまごつろきまぬ織
 木とらぞぐたごぬ夷大黒心
 正月まお食ハ飾よ極りて
 六 袖 辱 六 袖 辱 六 袖 辱

依和山由凡乃芥字少
む善はれく草と川出
まゝるの降つく年
存 六 細

集

十三

三 登

辰郎

杖う舟子吹をきれて夕の月
河原柳の一まゝにける 存六
お掻さるの海をもとを喰とく 本寺
ふらりのいよき 河原の丘 村
かこしたに伯父の読ま丸のり 六
能すやそあのみま ツカヒ 存

いそぐーノえきも七色の一思葉 ウ
 眩午一何ら正と月はれあき 六
 尼よるる音を階平ほひあき 六
 翠より乳味くまら音 六
 美海の久せ戸と潮の鴨の声 六
 又十とてあまぬせん 六
 土室の三三ひひゆる舞の内 六
 まるい画て平一月の澄き 六
 灯籠の果もちろつく比花盆 六

白川 石のそののあけき 六
 じさる子なれば夜の御船 六
 本形 町乃おのそハつき 六
 名 六
 よる能の日の守はあき 六
 伊勢のまれ砂のれあき 六
 浮舟のそこの換根とをやり 六
 仙でますら 六
 城下 六
 めつらりと拍業に出原 六
 むすまの 嫂とあつとえや 六

さへはや入付かゝる信人旅
 又ほろく批て尺をさるる
 夕涼みあり坊中しよ友の月
 掃除の法れ十系の具さ
 似成の土葬人うさき海芽原
 小傍、母子とくるとくらの立
 合徒干蓋大根と折曲て
 師をよまきうと支那の糞取り
 水は良とみいで焼く危の内

六 六 六 六 六 六 六

去年乃燕のあはれ
 今听れ垢塵の末くも
 つげ木の轆ろを風送せ

六 六 六

三吟

毛純

詠者そ宛明き岩より牡丹
 細く涼しきあきのほく
 而外乃軍けり夜交て
 杖もやしく湯豆宿の月
 菊のをも令成りて遊ひ
 穂じ守の地よみ及百姓
 六
 六
 六
 六
 六
 六

ひつくと悔夜病よまひれて
 武士荷つて身れんる休まね
 あもれまのゆるさる乃其の
 よい寺よるる若原乃山
 月ちよみつと八る危の地そ
 女と年々中よ如房之人
 まよの物たよるる海に
 酒とよみんこと世もすじ
 もの陰袖前流乃旗枕
 六
 六
 六
 六
 六
 六

一 本 陸 子 海 へ ち ち ち
 山 一 け ち ち 六 尺 ち ち ち ち
 名 産 板 平 月 の 徳 と ち ち ち ち
 頂 子 ち ち ち ち 上 尺 底 一 ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 只 月 代 八 ち ち 本 の ち 間 畧
 傾 城 乃 比 女 子 ち ち ち ち ち ち ち
 脈 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

己 六 丸 密 六 己 密 丸 己

ち ち ち ち 下 弦 乃 月 の ち ち ち ち
 松 茸 年 ち ち ち ち ち 補 の 山
 峯 入 乃 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 即 非 の 下 ち ち ち ち ち ち ち ち
 采 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 着 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 一 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

丸 己 六 丸 密 六 己 密 丸 己

寺後状乃判と見たり
よいむしとや惜く
き服の中よりしるしの声
六 意

二 陰

詳六

三白んまゝ乃眼病を治すを
日向を照らす乃乃海を
奉公より生得おれ
中てとらるる
月の状をく
服のすくぬ
六 月 中

上^ウ下^クで送りむくの観まつ事 由
 飛^ヒく^クら^ラの布^フは^ハ 由
 ちや^チう^ウら^ラと^トは^ハの^ノ舞^マ子^コは^ハあ^アて 由
 陰^{イン}気^キと^トは^ハの^ノ舞^マ子^コは^ハあ^アて 由
 懐^ケ倉^ソ取^リ女^メ房^ボの^ノ顔^カを^ヲ化^カ粧^ズと^シて 由
 鳥^{トリ}帽^カ子^ゴで^テ祿^{ロク}互^ゴの^ノ出^デッ^{入^入ッ} 由
 ま^マ帝^{テイ}子^シあ^アる^ルま^マ山^{サン}乃^ノ暮^クあ^アる^ル 由
 衣^イと^トつ^ツけ^ケて^テス^ス衣^イ小^コ乃^ノ十^{ジュ}の^ノ夜^ヤ 由
 袖^{スエ}房^ボの^ノま^マも^モ寝^ネ不^フも^モ定^{テイ}ま^マる^ル 由

華^カお^オ織^{オリ}ま^マす^スに^ニテ^テの^ノえ^エを^ヲ 由
 ち^チう^ウら^ラと^トは^ハの^ノ布^フは^ハの^ノ口^クつ^ツさ^サら^ラ 由
 婿^{ムコ}も^モは^ハて^テゆ^ユく^クら^ラの^ノ口^ク 由
 名^ナ白^{シロ}い^イ也^ヤ也^ヤは^ハお^オ揚^{ヨウ}く^クの^ノ言^{コト} 由
 牛^{ウシ}っ^ッは^ハく^クて^テよ^ユく^クら^ラの^ノ口^ク 由
 上^{ウヘ}体^テ乃^ノ衣^イ子^シは^ハの^ノ口^クつ^ツさ^サら^ラ 由
 ひ^ヒよ^ヨら^ラと^ト舞^マ子^コは^ハあ^アて^テ舞^マ子^コは^ハあ^アて 由
 ほ^ホく^クと^ト舞^マ子^コは^ハあ^アて^テ舞^マ子^コは^ハあ^アて 由
 え^エか^カな^ナる^ルま^マの^ノ口^クつ^ツさ^サら^ラ 由

杖子のよほおひぬせられぬ
にねんをむけてせらるる
嵐のよ折口の丁子新い入
棚物のおほくをるり
あつちの中より尺の言の思
ほの波風の浪をすす
おほ他の二毒をすす物お集
田今そそおの程ぬ切とく
るえの溜の代はるの思
六 六 六 六 六 六 六

まうつて通るお乃る方
空ウツのまもものふゆてそまお
ふねんげてゆまの思
六 六 六

六六

六六

七師三回忌 報恩

許六

月雪は漸く融しつゝ新しき花子は
 小まきの花はれもまをりり 李由
 考る事のたらしの事よれりて 本導
 お役同志の御用さしや 朱知
 懐のふくれりつれも其心 汶邨
 きふ取^{カキギ}了と人子押る 馬佛

家くま畑ととる揚や所 米虫
 松めつゝ子孫子いゝれ也 胡布
 教の子はおき牛房れ小守袋 之流
 是れ目鼻ある醫者の新宅 程巳
 人岩のほはやく城の海 徐寅
 和帝 賢平 荷を先へやる 六
 名後を取てまゝの腹より 由
 根を付してお換ふる 尊
 状の目子村中こそる 念ひ余 油

二
ははつあしあらまき月の月
月一美でたにんる人たにわは
一歩もくくくくくくくくく
きんてよき佛の御洗の確
有平一きくくくくくくくく
佩板のひさくくくくくくく
味香焼川と執事のりりり
か〜所の禪子孫くくくく
る、教れてまきまきまきま

村佛密布既己子六曲

いひたやう張の念をんてり
早^{ハタカ}麦あ〜くくくくくく
黒い茶廿の伝くくくくく
白宮の所の山のくくく
取えよぶんとくくくくく
まき材木て〜から既既既
る〜くくくくくくくく
日光をりあ〜くくくくく
ほ〜^{カマキ}被の 紐とけま〜

及袖村佛密布丸己子

巻

門の外ありねじ大佛
 六
 ぢりくくと車のきけ花日記
 由
 そ衣文乞の夏の境家
 筆

評世
 月ハ栞千鼻ハ似之やし雲佛
 馬佛

悼馬佛

茲より西子ちた月廿二日六成堂の馬佛倒の翁
 血とくうんて孫よりまうね六年れ多病は
 毎夜吟席と欠ホくも仲林又病夜子外て孫
 士り三夜の誼成まゝする孫て一軸と送れん
 故と似て自病る佛し探家可きハあれと亡伸
 三回念の遠る秋因の席すて遠かそくさしそ
 花足らんハいゝやまゝといひおす句もくふせん
 むしゝとあぬ茶くすしとさものふの氣を
 も下種し死息をあゝそゝる脈と利は前子
 ろもれつゝ子鳥の脈を肥す噓くうり
 汎種の片腕をたとされむ下月おの遊ひな
 るく一人と欠る千梅万物の悲海平

一く雲あふりき各故去追悼して、
断金のちまうと謝すのこゝ

存由

干乾もさされ子元の離れ際

河舟てらん川とな子をるる、
跡並

み中の味嗚子こまゝぬ旅ひて
計六

何狗の酒は月のかゝ丸
朱袖

道のるまぬけて出る一とを
本母

しす傍のま子杖のぬゆ
程已

羽と少子久流すは空所
反村

西大倉乃ニ一うけく
餘事

鼻よせて嗅て出れる紙の箱
乞紙

糸のつゝ千つひひの縄
糸束

放系のははすれん出のる
紙筆

余自記行 丁 師友之鈔別

許六離別詞

去年の杜よりあま子西にあせこや一二月
 けみほゆきあけりむそとれみ乃をめて
 りしはまき然けしそそ後日宝深とちりそ
 無盡はぬ風程とおきすそころみよとま
 あま子あま子のあねや風程のちねとつて
 風程のあねあま子や雲のあねとつてそ
 まうふりしあて用はあま子一五年

とも君よはも能と知とえれし品ゆは
 那て用一あるそそ威もや書思はとほし
 手の師は風程はけして予うまきそそ
 されとも妙の書ハ精神徹み入等語妙と
 ぬるし其志をさるは予の及風程はあま子
 予の風程は書都た扇のこし一れよそ
 りて用はあま子一も、新何ありのことん
 のこころそあま子云らそそあ、あま子そ
 ぬましそあま子あま子一たはらぬと

のうきまらふしらのみこまらふし類三実
 ありて志も怒りいとうねらふのうきまらふし
 しやれとふらふし力少して七細記
 一多記ゆらうししはさうまなれれ
 古人の記もいさ言人のおふふに
 ともうのうし南山大師のうきまらふし
 もかへしうし此類もいれみうしうきまらふし
 燈ともうしうしまづはみまらふし送りて
 とうきまらふし

元禄六孟其集

此巻坊色菴述



元禄六八月六日の辰辰しし
 はうりうらふおとらき例のうきまらふし
 を使としてはの類ハももる台海
 を記してさう文もみえ井しとさう
 まらふしの記もみえくふるをしるを

つひに平海よりあつた人よははる
るうみんれし木由やふあしてふ
籠天滄溟のれもいせまうおれ
別の情あさううそそそ夜句を
いこゆんちりよきそそあひひ
そそしししまはるまいけとあ
りり金 秋風よふか 節あり

長句

木更海と海へ日里かか何人の木川
とよち一う風情あつた人よははる
るうみんれし木由やふあしてふ
籠天滄溟のれもいせまうおれ
別の情あさううそそそ夜句を
いこゆんちりよきそそあひひ
そそしししまはるまいけとあ
りり金 秋風よふか 節あり

ALM

椎のもほはゆもし似よ本なるの流るるは
 とよ人の流るるなる人本なるの流るるは
 あり一人なる流るるなる人本なるの流るるは
 今滅はの流るるなる人本なるの流るるは

詠別

雪の指や遠月とてしぬあやのよは 松風
 を望まばし流るるなる人本なるの流るるは 桃隈
 本は流るるなる人本なるの流るるは 石置

本なる山あふの流るるなる人本なるの流るるは
 のしゆけりよすしゆけりよすしゆけりよす
 牧のなるきよなる人本なるの流るるは 草中
 とるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 安氏
 ふとこなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 田氏
 甲斐のなるあふの流るるなる人本なるの流るるは
 乙の流るるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 陳曲
 丙の流るるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 隣部
 己の流るるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 日鮮
 壬の流るるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 前氏
 癸の流るるなるあふの流るるなる人本なるの流るるは 達化

戲子扇の形と

漏して其

中子

題寸

此の扇の形と
 漏して其
 中子
 題寸
 此の扇の形と
 漏して其
 中子
 題寸

此の扇の形と
 漏して其
 中子
 題寸

元禄六
 其甲月



奇地ともいふれん跡あり乃
湖沼今もあきく畧す

甲路記行

又十のり脚は一盞の程もあつぬいゆ上人
独の上也藤氏八列の逆旅を皆不平れ上
乃流流也台人の是なるも地なるも其の凡
程の遠さかすして方丈の情と遠よりを思
水の客となくも二十季ある所ハ石はは
つめは殺とあき土岸の草と草とあき
るめはひ又しりーのひはあつて碓氷乃
ちよまよひはあつてあきとあきり巴三つあ

乃ふ高西南少々を乞す事今て十一度
也其利山郭本れ少く石のきく可まひあはれ
たはまのあうりまはねぬぬ約強ひてするた
ハ甲斐の猿橋を渡り上の後防より又
まやふ免の川をたゆまき枕とふじと如
下まらまの紀のりとたきく名示の和歌た
戦場の由馬成とめて旅りのま表に収めどく
袋をまきれ位と福ひ千枚のち付とあうりて
枕の下まのまいり家じしよーかゝるはのり也

め未え東取く心ゆきまも成りやま羅羅れ
一たうのまきこあし寸月旅を啼てやし市よ
行人のまきこはま前途とすぬぬれは月
六日武ね乃旅と退

卯のましままの馬れ旅のり

日このまきこあぬ記れまゆりて名まとそ
ひれままのあうりの白代おりくたあやまの
名まもあれたれともち寸まあれと旅
の旅れおるまあつあゆりされは賦記り

統すくひのなるくまあまあつめてるるへ
おろしけりやよくん亡師のころんれ一烈
そしちれととるや

ゆね今統の賦 母小序

藤それ統のむん統の道あり乃統あり家
統の足あり一皆統の情也よるぬ白川
乃田統ありとす統の果なりつるふ由り言
統をよまふたるととるしあつて山のま

すみま吹浦とまうん統は横ふ天
の川よ統杖れ統ととるゆれより統乃
二んを統て七百三十余統ととるる
あ統れ刀をと威一統の敵ととる
此統ととるりゆひん統の店と統ととる
の統統ふたふ時予は統中好の統とく
せて統して何事ととるは統守ととる
統ととる統ととるあつめ統又統と
あつめ統の統ととる統の統ととる

旅店の上段に書院風に寝た可う
火のつき火施もやうけし門の入り口
傾ておしう店も小所のさるに夜への所
了もふりし出女乃豊崎は其れとさう
根よ極おはるて隅くまき豊そく
天井梅子まはるもまきいつき強行可
くくぬぬいさる戸の心とふまはれり
所を靴賣させしゆれやしくま枕と傾
高しゆき極今れはるここれ考ふるるは

破る出たらんせんと云少く失するは旅人も
自もよく極て夜のゆいさうくはるも
み久——

大名乃寝間も極ふるさる
及それの上いこぬしの胸はくさと
かの能いしとまき馬ととはる公一
の位もさる極あま——鯨の写ぬすれ
れ男と記し極純とゆておるを
と極のまき入りの二番の入るは

何の爲もや 何くの秋葉千 毎のたしく
とつふらうし

世後まのなる子あきし旅のあは
つちとては 恨まかまへし

はらのあはれは 顔酒のあまふしなり 摺汁
味の顔や 喰ひのあまふし 堀王のあまふし
まのあまふしとて 了るもあまふし 次ふし
すむらゝ 運飯のあまふし 顔のあまふし
あしとて 八ん身は 其も也 玉子は 者なるも

木事の流ら 風紙は 折るんさ 折の着板は
筒とて けしを 畏弱のあまふし 去る
食もさうぞ

宗愈平 其の室押や 中けの山
舟川の上る 其の顔の情さ かくかき
し 又月のあまふし 傍のあまふし 書入れ
おの 州の戸を 流るれ 有けの傍を
細しとて 其のあまふし けの 傍 田舎
の 賊也 其の傍を 何み川と ありし 所を

大きき酒盛也天統の中乃れ洩れる人
とてしよまよふ人ハ股へけ入て前と
肩へけてまらある者ハ負れあな
て舟船を立身取つ池とくこい海に
場的情也るまかる麓野平野重子日月
とがらり一盃の角ハ後熱の氣をや
あふ一生と流す 翻くと可ぬしてや夕の
引込る家々を思ふの日ま冬のある
又後の木の下ハ眠て城の於子まら

小飲冷と有るははるかけけし出
る方の合し得れ小使ハそ一アまら
吸しよもの裏みんさき海ハ身の究
細り念ハんそ一よむすよ一と勢のく
も言て世はあら人とのこく月日と
出碧のそよし空のく風ハ世とせま
かろ人よあはら

出女も出らるる都やひの言
流伝源由のよまそあれあらもう

おろされ独房より名をかりて過河しよ
二夜にたりす月白れ乾雲の夕暮
は清ふきあけりて長お鼻き衣
てぬれら物と焼たよあけら
恙神といふ物ととりてとわ
を体むれた物めのれ場より追
れて却てのぬえりて股とす
方のよま枝と携て歩む
人間病死のちまを時とす

醫燈のたすけと懐中の振栗いやく
急病と防く巡礼の脚の旅に
倒れ外天月あら所業は追
係の懸とよて山下に入ら
よ美泉の下に流く
旅りよ志す大なる
靴い衣類の持取といれよ
必のいある人とよふるも
器戸の辻堂の蓋は徳文とよ
て同行の

別と情と隅田川の急流と為て亡きうた境
を憂う今来に彼の人旅懐の情とをくして
凡我の腸とさうす能同ハ白川の奇と
よみて二心いらのくし海さ不之知るの三
句と出てすやわぬ里と海と者ハ貞室
老人也東海人の一すもきぬ人凡我ハ
おにづらうしといひし翁の若く年一を
う海と一しとすれ

千言え禄九年丙子冬臘月日於

風狂堂 選之

111

五老井主人

武林

木六相官

許子六

孟耶觀全頭

月澤衛人

買年僧李由

辰寺町二条上町

井筒屋二条上町板

